

「インド国内ワクチン接種状況と今後の課題」

田中 啓介

2021年4月ごろから急激に増加しているインドのコロナの感染者数。5月には1日当たりの新規感染者数が40万人を超え、過去最多を記録しています。感染は拡大しているものの、インドはワクチン接種の開始にいち早く取り組んだ国でもあります。インドでは1月後半からコロナの予防接種が始まりました。現在45歳以上と医療関係者を対象に予防接種が進められており、5月1日からは年齢制限が18歳以上に引き下げられています。

新型コロナウイルス感染者を追跡するモバイルアプリ「アローギャ・セツ(Aarogya Setu)」は、アーダールカード(Aadhaar Card、インド版のマイナンバーカード)や携帯電話番号と紐づけられており、ワクチン接種をするとアプリに記録されます。さらに、電話番号に送られてくるURLから、クラウド上に保管されているワクチン接種証明書のダウンロードが可能です。

＜インド政府推進のワクチン・ポータル「CoWIN」＞
インドでは数年前から、ワクチン情報システムeVIN(electronic vaccine intelligence network、全国予防接種プログラム)を使用しており、ワクチンの在庫、供給状況、温度変化などの情報をリアルタイムに提供してきました。CoWIN(Winning Over COVID-19)とは、eVINを拡張したもので、インドにおけるコロナワクチン接種の計画、実施、モニタリング、評価を行うためのクラウドベースのITソリューション(ワクチン・ポータル)です。インドでは今年1月16日にコロナワクチン接種活動が始まり、同日CoWINの発表がありました。

CoWINポータルへの登録は、番号とワンタイムパスワードの入力だけで完了しますが、ワクチン接種の予約は、需要と供給の間に大きなギャップがあり、難しい課題となっています。というのも、CoWINのプラットフォームでは予約枠の空き情報を通知する機能がないため、早くワクチンを接種したい18~44歳の年齢層に該当する人は、CoWINの前に居座ってポータルをリフレッシュし続け、空きを見つけた瞬間に予約登録をしなければならないのです。そんな中、インド政府は4月28日にCoWINのAPI(※)を公開しました。それにより第三者者が予防接種センター、地区リスト、予防接種の予約等の情報にアクセスできるようになります。

インドのITエンジニアたちによる、予約の空きをリアルタイムで通知する多くのサービスが生まれています。

＜ワクチン外交と今後の課題＞

インドは2021年2月頃「ワクチン外交」に本格的に乗り出していましたが、現在インド国内での感染者数増加を受け、ワクチンの輸出に制限をかけ、国内への流通量を優先しています。5月時点すでに2億人近い国民が1回目のワクチン接種を終えており、第2波を受けて急激なスピード感でワクチン接種を進めており、2021年夏までに3億人へのワクチン接種を進める計画を打ち出しています。

一方で、ワクチンの輸送には課題があります。インドのコールドチェーン(生産から消費地まで一貫した低温状態を保つ物流システム)が脆弱なため、現在は現実的な温度管理が可能な「コビシールド(Covishield、オックスフォード大学とアストラゼネカ社共同研究)」と「コバキシン(Covaxin、ハイデラバードに拠点のあるバラッド・バイオテックインターナショナル社開発)」、そして5月からはロシアの「スプートニク(Sputnik)V」のみがインド国内で扱われています。高い効果を誇るファイザー製のワクチンはマイナス70度以下の輸送が必要ですが、マイナス70度の低温を保ったまま広い国土に輸送する技術が確立されておらず、ファイザー社はいち早くインドでワクチンの緊急使用許可を申請していたものの、輸送状況に問題があるとして2月に申請を取り下げていました。今後のインドワクチン動向に注目が集まっています。



【KEM病院でのワクチン接種の様子】

※API : Application Programming Interface、ソフトウェアやアプリケーションの機能を共有する仕組みのこと。